
Candy Box

カンダユウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Candy Box

【Nコード】

N0147J

【作者名】

カンダユウヤ

【あらすじ】

あなたの心に1粒のキャンディーを

不思議なアメの瓶を持った少女が人の心を癒します。

さあ、あなたの癒しの1粒は何ですか？

キャラメル

プロローグ

どうして人は生まれるのか。
どうして人は死ぬのか。

何のために生き、何のために死ぬのか。
その答えに正解も不正解もない。

自分の生まれた意味を求める人もいるけど、そこまで肩肘を張って
生きようとしなくてもいいんじゃないのかな？
ほら、肩の力を抜いて、一息ついてもいいんじゃない？

一粒のアメなんか食べてさ。

キャラメル

ああ、雨だ。

今日も、昨日も。

……ウザッ。

服は濡れるし、ジメジメしてるし、出掛ける気分が削がれてしま
う。

ボケくつと頼杖をつきながら、沙世璃は雨で濡れる窓ガラスの外
を眺める。

机の下という死角になる場所で、沙世璃はケータイを操作し同じ
境遇の誰かとメールのやり取りをしている。机の上にはカモフラ
ージュの意味も含め、とりあえずテキストとノートを広げている。

現在の教科は国語。それも短歌を取り上げている。

作者はどんな思いで作ったかつて？ そんなの知ったこっちゃな
い。

何かを感じたからそう詠んだんでしょ？ 他人の意見なんてど
でもいい。

単にテストでいい点を取ればいいだけのことでしょ？

教師の目をかいくぐり、何度目になるか分からないメールの返信
をする。

途中、巡回してくる教師の気配に机の中にケータイを隠す。

教師をやり過ぎし再びケータイを取り出すと、「文面に今日も遊
ばない？」という言葉が。

「もちろん！」と遊ぶ気満々のデコメを打ち送信する。

そして、送信完了の画面が出る。

一日の授業が終わり、いつせいに生徒達が廊下に出てくる。

その中、沙世璃は女友達数名と談笑しながら廊下を歩く。

一方、違うクラスからは、折り目正しそうな男子生徒と男性教師が話をしながら出てくる。

「いいか、真田、頼んだからな」

「はい」

入り口付近で何かの打ち合わせを終わらせると教師と別れ、哲は沙世璃達が進んでくる方向へと歩いてくる。

いち早く沙世璃の姿に気付く哲。一方の沙世璃は会話に夢中。距離が近づくものの一向に気付かない沙世璃。哲は気付くんじやないかと少し顔を伏せる。

そんなことなど気にすることなく、沙世璃の一団は哲とすれ違う。何も気付かれなかったことに哲は少し寂しさを感じ振り返る。しかしそれでも気付かれることはなく、そのまま階段を下りていく。

「……サヨ」

風の囁きにも似た小声で、哲は名を呟いた。

学校帰りの足そのまま、沙世璃達はカラオケBOXにてカラオケを楽しむことにした。集まった人数は沙世璃を含めて4人。それぞれが持ち前のレパートリーからセレクトし、お互いの歌唱力を褒め合いながらひと時を楽しんでいた。

この日も、他のメンバーの一方的なクエスト曲を歌い終え、沙世璃は部屋の中央にあるローテーブルに置かれた自分のグラス脇にマイクを置く。

「はあ、サヨリの唄、いつ聴いてもいいなあ」

「何て言うか、癒されるって感じ?！」

「プロっぽいよね、サヨリの唄って」

それぞれ感想を述べる3人。まんざら嬉しくもないが、毎回のリクエストに些か飽きがきてしまう。

「はあ、あんた達が散々唄わせるから、そりゃあ上手くなるわよ」
過去、どれだけ唄わされたことやらと思ひ浮かべつつ、沙世璃は

一息入れるように氷の浮かんだジュースを飲む。

「よし、今度は、新譜、チャレンジしようかなっ！」

「ええっ！ この曲、もうカラオケに入ってるの?!」

などと、この一時を謳歌する一同。しかし、そんなひと時に終止符を打つ一報がポケットに届く。何気なくポケットからケータイを取り出し、開いてみる。一報の主と時間を確認し、沙世璃は一瞬顔を顰める。

「誰からメール来たの？」

「メールじゃなくて、電話。母親から」

「電話が来るって事は、もうそんな時間なの？」

一人が時間を気にしだしたとたん、残りの子達もそわそわしだし、荷物をまとめ始める。

「ゴメン、あたし、明日テストがあるから帰るね」

「あたしも、門限破ると親がうるさいから帰る」

「あつ、待つてよ……私も」

それぞれがどれも胡散臭い理由を述べつつ席を立とうとする。

「ちよっ、ちよっと待つてよ、1時間、ねっ、1時間だけ。無理なら30分でもいいからもう少しいようよ」

この楽しいひと時が終焉を迎えてしまうと悟り、沙世璃は帰る支度をする子達に声を掛ける。

「ゴメン、サヨ。また今度ね」

完全に帰る準備を済ませると、三人はそれぞれの割り勘分のお金をテーブルの上に置き、部屋を出て行く。

「……」

ただ見送るだけの沙世璃。気付くと、誰が唄うのか分からないイントロが始まりだす。

「チッ、金が足んねえんだよ……」

ざっと置かれたお金を勘定し、沙世璃は今の気持ちを表すようにケータイを長ソファーに放るのだった。

この日は、選択している科目による授業で、沙世璃と哲が同じ教室となる。決められた席に座するため、哲が沙世璃よりも後ろの席に座るようになっていた。

哲は誰に言われることもなく真面目に授業を受けるが、沙世璃は前の男子生徒が大柄なことを活用しバレルことなく居眠りしている。教師の話と黒板に書かれることを聞き逃すまいと忠実にノートを書いていた哲であったが、沙世璃のことが気になってしまい、ふと手が止まる。

「……昔から成績は良かったけど、高校に入って急に態度が悪くなったのはどうしてなんだ……」

だが、手が止まったのは一瞬のことで、心の中で思う哲であったが次ぎの瞬間には再びシャーペンを走らせていた。

とある昼下がり。母子が集う公園に見慣れない風体の少女が小動物と戯れている。

全身、萌黄色の衣装を纏い、どこその民族衣装を感じさせる服装。肌の露出が極端に少なく、唯一素肌を晒しているのは手と目元だけである。

近くの幼い男の子が、あれなあくにと近づこうとするが、母親が知らない人に付いて行っちゃダメと連れていく。触れ合いができそうだと思った矢先の出来事に、少し寂しさを感じる少女。

「……大丈夫。こういうの、もう慣れっこだから」

ちよこちよこと歩き回る手乗りサイズの猫を掬い上げ、少女は優しいげな声音で話しかける。小さな猫も思いを汲み取るように、円らかな瞳をクリクリさせ少女の指先を舐める。

「フツ、ありがと、なぐさめてくれるんだね。さつ、休憩も終わり。いろいろな人の心にキャンディーを配らないとね」

小さな猫の愛らしい仕草に少し表情をゆるませる少女。ベンチに置いた大きなショルダーバッグを肩に掛け、猫をバックの中に入れるとゆっくりとベンチから立ち上がる。

この日の授業は外が雨ということで、体育館でバスケットとなった。簡単にチームを決めさつそく試合が始まる。

多少のバスケット心得のある沙世璃は、ボールを手にすると常に単独で相手ゴールに攻め入る。最初のうちは思い通り得点できるが、徐々に攻撃パターンが読まれディフェンスに止められてしまう。それが繰り返され、優勢に進んでいた試合が引っくり返されてしまう。

同じチームの女子からボールをまわしてと声を掛けられるものの、沙世璃は素直に従おうとしない。

思い通りに得点できないことと、自分の思い通りに動かないチームメイトに苛立ちが募り、沙世璃のプレーがどんどん雑になってしまふ。ついに、ディフェンスに付く相手の顔を叩いてしまふという事態が起きる。

完全なラフプレーとして取られ、試合が中断する。苛立ちがピークに達し、沙世璃は持っていたボールを思いっきり投げバウンドさせる。

「大角、今のプレーは何だ！ 完全なファールだぞ！」

ファールを告げる笛を吹いた体育教師が沙世璃に詰め寄る。

「今のは、偶然です。たまたま当たっちゃったんですよ」

あくまで自分の非を認めようとしない沙世璃。その姿にさすがの相手チームの女子も力チンときて詰め寄る。

「ちよつと、どういふつもりなの？！ あれがたまたま当たったように見えるの？！」

顔を叩かれてしまった女子生徒は、まだ蹲ったまま立ち上がることはできない。

「言つとくけど、あたしは悪くないからね。あつちが強引に押してきたからあんなったんだからね」

たまたま当たったと主張する沙世璃はというと、いざこざから逃げると投げ飛ばしたボールを他の女子に取りに行かせ、人差し指の上でボールを回転させ始める。

「大角！ 例え、たまたま当たったとはいえ、一言謝ってもいいんじゃないのか？」

「あたしは悪くないんですもん。謝る必要なんてありませんよ。あつちこそ、悲劇のヒロイン演じて、みんなの同情を買おうとしてるんですよ」

完全に回転させるボールに集中している様に、食って掛かってきた女子がボールを叩き落とし沙世璃を突き飛ばす。

「ちよつと、何すんのよ！」

「あんたね、世の中、自分を中心にして回ってるって勘違いしてんじゃないの！ 成績も運動神経もいいからって、調子に乗らないで！」

売り言葉に買い言葉となってしまう、沙世璃もブチ切れてお返しとばかりに女子生徒を突き飛ばす。

「何よ！」

「何なのよ！」

互いに一步も引かない姿に、流石の体育教師も仲裁に入り二人を分ける。

「いい加減にしろ！ 大角、お前は どうして自分の非を認めようとしないんだ。何にしろ、お前はもう試合に出させない！」

そうして一人試合を外されてしまう沙世璃。怪我をした生徒はそのまま保健室へ行くこととなり、中断していた試合は相手のフリースローから再開される。

「何よ！ 何よ何よ何よ！ どうしてあたしばつか責められなきゃいけないのよ！」

何事もなく再会される試合を見ることなく、沙世璃は一人体育館を抜け出した。

「何よ……何よ……あたしばつか……」

一人ムシャクシャした思いを抱えたまま、沙世璃はジャージ姿で校内をウロウロしていた。外は相変わらず雨脚が衰えず、屋外は薄

い膜に覆われているように風景を暈している。

中庭と外を繋ぐ渡り廊下に差し掛かった時、学校の敷地内に見慣れぬ格好をした人物がいるのを見つける。どうやら雨宿りをしているらしく、木の根元で直立したまま動く気配がない。

一体、どんな人なんだろうと気になってしまい、沙世璃は視線を外すことなく謎の人物を眺めていた。暫し見ていると、急に振り返りあちらの方から話しかけられる。

「あつ、お邪魔して申し訳ありません。何せ、雨を凌げる場所がなかったものですから……」

何の穢れもない、野に咲く一輪の花のような笑みを口元を覆っていた布を取り浮かべる少女。丁寧な口調で一言申し出る。

「……」

沙世璃は相手の出方を窺うように、終始無言でポーカーフェイスに振舞う。

「あの、わたしカメラって言います。そして、こっちがお友達のスイートです」

自ら自己紹介をしつつ、お友達と称する手乗り猫のスイートも一緒に紹介する。

「そちらかでも見えるでしょうか？ わたしの手の上に乗ってるわたあめのようなものがスイートです」

少し掲げて見せるカメラ。しかし、全くといっていいほど沙世璃の反応はなく、結局一言も口にすることなくその場を去ってしまう。

「あつ……行っちゃいましたか……」

掲げていた両手を鳩尾の位置まで下げ、カメラは少々残念そうに視線を落としスイートを見ていた。

体育での一件が担任の耳にも入り、沙世璃は放課後、教務室にて説教を受けることとなった。相手方のケガも大したことはなかったとのことで、彼女は教務室という教師たちの視線の集まる場所にて

注意という形で決着が付いた。

それでも沙世璃は反省する気もなく、蓄積してしまった憂さ晴らしをするため友達数名に遊ばないとメールを送る。いつもなら5分も経たない間に送った全員から返信があるのだが、この時は返信率が低く、内容も消極的なものばかりであった。

「何なんだよ、こんな時だってのに……」

乱暴にケータイのボタンを押し、沙世璃は廊下をよそ見しながら歩く。誰が通り過ぎたのかを気にすることなくつかつかと歩く。

ちょうど角を曲がるうとした矢先、死角から誰かが通ろうとばかり出くわす。哲だった。

「さっ、サヨ……」

いきなりの出来事に対応がきこちなくなる。一言声を掛けたのにも関わらず、沙世璃は何の反応を見せな。

そのまま通り過ぎようと哲の横をすり抜けようとする沙世璃。しかし、それは思い通りにはいかず左手首を掴まれる。

「ちよっ、何よ?!」

「……変わったよなサヨ。今までのサヨはどこに行ったんだよ」

必死に振りほどこうと沙世璃は腕を引っ張る。しかし、哲はそれ以上に強い思いを込めながら手首を掴み続ける。

「何言ってるの？ 意味わかんない!」

「昔のサヨは違ったよ。成績は良かったけど、周囲に自慢したり威張ったりしたことがなかった。もっと思いやりがあって、誰からも好かれてた。それが、何故……」

まるで腕と体が別人格のように、力を込め続けている腕とは対照的に哲の表情は穏やかで真摯に沙世璃を見つめる。

「はっ、離してよ! あんたに関係ないでしょ! あんたに何が分かるのよ!」

片手でダメなら両手とばかりに、沙世璃は掴まれ続けている右手に加え左手も使い力一杯腕を引き抜く。反動で少しふらつくものの、そのまま通り過ぎていく。

感情の赴くまま、沙世璃は一気に屋上へと続く階段を駆け上がった。今までの出来事が頭の中でフラッシュバックする。

楽しかったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと……

毎日が楽しければそれでいいと思っていた……

自分の思うまま、何でもできると思っていた……

だけど、現実……

発散しきれないもやもやが体の奥底に蓄積し、屋上に続く扉を開けると同時に虚しさへと変換されてしまう。

息を切らせ屋上に飛び出した沙世璃は、呼吸を整えながら周囲を囲っているフェンスの前へと歩み寄る。

さっきまでの雨が嘘だったように頭上の空はまだ青さを保っているが、視線を下げると空と陸の境界線からオレンジ色に染まりつつあった。

「……誰も分かってくれない……誰も分かってくれない……」
力なく金網を掴みうな垂れる沙世璃。順風満帆だったはずの世界が急に閉ざされ、世間から隔離されたような絶望感に襲われる。そして気付かないうちに両目から涙が零れ落ちていた。

「……何故悲しんでいるの？ 何故泣いているの？」

どこからか聞こえてくる優しく包み込んでくれるような少女の声。沙世璃の心に潤いを与えてくれる、安心感までも注いでくれるような声。

「……えっ?!」

振り返った先にいたのは、つい数時間前に木の下で雨宿りをしていた風変わりな少女であった。どこから入ってきたとか、何故ここにいるのかという疑問が掻き消されるほどの衝撃が沙世璃を襲う。
「何があなたを苦しめているの？ 何があなたを絶望させているの？」

二人の距離は徐々に狭まり、謎の少女は口を覆っていた布を外し

顔の全体像を見せる。

「あなたの心に、1粒のキャンディーを」

優しく囁きかけながら、少女は不思議な光に満ちた瓶を差し出す。それは、異次元にでも繋がっていきそうなオーラを放っているというのに、不思議と不安や迷いを与えない。

沙世璃は何も警戒することなく、差し出された瓶の中に右手を入れる。

差し入れた瓶の中は表現しにくく、どの感覚でも処理しきれないシックス・センスでさえも容量をはるかに超える空間の中に自分の手だけがある。その中において、沙世璃は『何か』が自分の手の中に収まるのを感じ、そのまま瓶の中から手を抜く。

ゆっくりと抜いた右腕半分は何も異常はなく、体温も触覚もちやんと感じ取ることが出来る。そして、ゆっくりと掌を開いてみるとそこには1粒の細かく包装されたキャラメルがあった。

「キャラメル？ 何で？」

どうしてそんなものが自分の手の中に収まっていたのか、素直に疑問を抱く。

「それが、あなたの癒しの1粒なんですね」

キャラメラも出てきたキャンディーを確認するため手の中を覗きこむ。

「あたしの……癒しの1粒……」

どこか半信半疑ではあるが、手にしたキャラメルの包みを開くと何の変哲もないキャラメルが出てくる。沙世璃は不信に思うことなく口の中へと入れる。

入れたとたんに口一杯に広がるミルクの風味と甘さ。そして、一緒に過去の思い出をも連れてくる。

無邪気に遊び回っていた幼き日。

ケータイも、お金もなくなっちゃって楽しかったあの日。

毎日遊んでいたのが当たり前だと思ってくらい、あたしはアイツと

一緒にいたっけ。
哲。

親同士が知り合いだったし、同年だったってこともあってよく一緒に遊んだんだっけ。

同じ小学校、同じ中学校、そして同じ高校へと進級していった二人。よく、どちらかの家に行って勉強もした。

家族ぐるみで海水浴、キャンプ、旅行にも行った。そして、いつももらっていた箱入りのキャラメル。小さな箱に入ったキャラメルを二人で分け合った。

そう、キャラメルのように、楽しいこと、嬉しいこと、悔しいこと、悲しいこと、全部、二人で分かち合ったっけ。

全部、一人でこなしていたと思ってた。何でも自力でできる自信だっただけ。けど、自分でできることなんてほんの微々たるものだって気付かされた。これも、アイツが側にいてくれたから、今の自分がある……

口一杯に広がるキャラメル甘さの今までの思い出を、瞳を閉じ噛み締める沙世璃。いつの間にか抱いていた邪念は消えていた。

閉じていた瞳を開けると、さっきまでいたカラメラの姿はなく、その場所には哲が立っていた。

「サヨリ……」

直立不動の沙世璃に声を掛ける哲。思い浮かべていた人物の優しく名を呼ぶ声に、沙世璃の迷いは消え去った。

「……テツ」

自然と紡がれる昔のあだ名。散々、哲と書いて『あきら』と読むんだと指摘され続けたことも思い出す。

「……僕の名前は、アキラ。テツじゃないよ」

「……知ってる」

このやり取りをしてようやく、二人のわだかまりは消えたのだと確信する。

「久々に帰ろっか。一緒に」

「……うん」

今まで見慣れていたはずの笑みに、哲はぎこちなくではあるが微笑みを返すのだった。

E
N
D

ペーパーミント（前書き）

予定よりも長くなってしまいましたが、ようやく第二話です。
ストーリーの流れを気にするあまり、当初、思い浮かべていた
ことからややそれてしまいました。

相変わらず、カメラの登場シーンは少ないですが……

ペーパミント

ペーパミント

どこからこんな多くの人間が集まってくるのだろうか。

時速100kmで二本のレール上を車輪を軋ませ走る電車。

現代における公共の移動手段として、化石燃料を動力とする交通手段に打って変わって開発の進む電車。山間部などの電力が行き届いていない場所ではまだ燃料を使用するタイプの電車も重宝されているが、確実に電気だけで稼動する電車は増えてきている。

特に人口が密集する都会では網の目のように路線網が発達し、建物が入り組んだような狭い地域でさえものの数分で通り過ぎ目的地へと運んでくれる。

それはある意味密室に近い状況を作り出し、すし詰め状態となった車内は身動きどころか呼吸することすら容易ではなくなる。行動範囲が狭まれば狭まるほど、この密室の車内は俺のテリトリーとなる。

人が多ければ多いほど仕事がいやしくなる。まさにこの状況こそ俺の力が最大限に発揮される。

だいたい狙う相手は決まっている。スーツに口の広いバッグを持った奴が大半を占める。

それでも、それはテリトリー内に入った獲物に限定される。動きが制限されるため、むやみやたらにターゲットを漁ってはいけませんに思われるし、逃走の際に余計な足止めをくらうこととなる。

おっ、テリトリーに獲物が入ってきた。

標的は50代くらいの中年オヤジ。勿論、身形はスーツ。都合のいいことに、近くの女性に嫌らしい目線を向け妄想に耽っているのか、あるいは死角でお触りをしているのか分からないが完全に俺の

存在に気付いていない。

今がチャンスだ！

人が密集した隙間を蛇のように腕を縫わせ、中年オヤジへと伸ばす。瞬きにも満たない瞬間に懐へと手を差し入れる。当たりをつけた場所に『お宝』があつたことに歓喜し、素早く、盗る！

その速さは肉眼でも目を細めてでも見えることはなく、何十人という人の目のある場所だというに誰も気付かない。

『お宝』の大きさや厚さを吟味し中身を確かめっていると、グッドタイミングでプラットホームに滑り込む電車。

ああ、なんてツイてるんだ。

後はいつもの通り、俺は雑踏の中へと消える。被害者には悪いが、もう俺を捕まえることはできやしない。

とある小さな会社で事務員として働いている茅場桃子。入社してかれこれ4年が経ち、事務員としての仕事も板に付いて立派に職務をこなしている。今日も電話対応や雑務に追われ忙しい日々を送っているが、それを遥かに上るだけの幸せな時を過ごしている。

仕事の電話を終わらせ電話を切ると、そこへタイミングよく隆昌が現れる。大きなガラス窓を軽く叩き、これからメシに行かないかというジェスチャーをする。

一方の桃子は、掛けているメガネを調整しながらにっこり微笑み、『OK』というジェスチャーを返す。

ちょうど昼食の時間帯に二人は近所の定食屋にて食事をする事にした。上手い具合に4人用のテーブル席に着き、二人は向かい合って座る。

「桃子、あのさ、ちょっと早いんだけど、誕生日プレゼント」

桃子の食事が終わるタイミングを見計らい、隆昌は隠していた小箱をテーブルの上に置く。桃子は物珍しいそうにそっと箱を取ると、ゆっくり箱を開ける。

「……綺麗」

細長い箱に入っていたのは紛れもないネックレス。光輝くそれは、どう見ても安値のものとは想像しづらい。

「……あぁ、ダメダメ。こっ、こんな高いもの受け取れない」

自分の趣向や何より宝石類を身につけたことのない桃子は、煌びやかなネックレスを目の当たりにし拒否反応を示す。

「心配すんなよ、高級な宝石店なんかで買ったもんじゃないって。そこいらでやってる露店で買ったんだよ。懐の寂しい俺が高級品なんて買えるわけないだろ？」

「例えそうだとしても、あなたからプレゼントなんてもらえないよ。だって……」

隆昌には桃子が次に何を言うのか見当がついていた。桃子の方もこれまで何十回と口にしてきただけに、躊躇いが生じる。

「……分かつてる。それ以上言わなくても」

「でも……」

分かつている、理解していると散々聞かされ続けていたが、何の進展も見せない事態にいらぬ心配が募る。

「そりゃ、いろいろ当たっているさ。だが、どこも不景気で雇っちゃくれねえんだよ。増して、俺には前科がある。そんな、世間のはみ出し者を雇おうと考える奴なんていねえのさ」

「でも……生活するには、お金が……」

「心配すんなって。今までの貯金とバイトでやりくりしてっから」

これ以上いらぬ心配をさせぬよう、隆昌はテーブルの上に置かれ桃子の手にそつと手を乗せる。彼女も、これ以上聞くまいと小さく頷く。

「あつ、あのね、大事な話があるから、今日は寄り道しないで帰るね。隆昌も道草しないだね」

メガネを掛けた奥の瞳を優しく綻ばせ、桃子はお会計伝票と荷物を手にレジへと向かう。

「……俺も、大事な話があんだよな」

桃子が去った後、隆昌は周囲に気付かれないような小声で独りこちするのだった。

隆昌は正直な所、ここ数年、定職に就いていなかった。

今まで何社と面接を受けてきたが、ことごとく全て不採用ばかり。前科という社会的烙印を押されてしまったばかりに、隆昌の社会復帰はおろか逆に世間から疎外されるほどだった。自分の犯してしまった愚かな罪が己を蝕み、消せない十字架を背負わされているのだった。

昼食代金は勿論桃子が払ってくれた。いつの日か自分の方から進んで払おうと心に決めているものの、慣れてしまった習慣を変えることはできず今日に至っている。

完全なるブー太郎の隆昌は、桃子が帰宅するまでの時間をどうにか潰すため昼下がりの公園へとやってきた。

ベンチに座り、一服しようとケースから直接タバコを出し銜える。常に一緒に持ち歩いているはずのライターが見当たらず、あたふたと周辺を探す。肝心の火がないことに落胆し諦めようとした矢先、目の前に突然現れるオレンジ色の火。一瞬、夢か幻かと戸惑う隆昌だったが、見上げた先にいた人物に心当たりがあった。

「よお、隆昌」

「……」

何の反応を示さないまま、隆昌は目の前で揺らめく火にタバコの先端を着火させる。

「何だよ、久々に会ったつてのに、無視か？」

火を貸した人物は隆昌に了解を得ないまま隣に腰を下ろす。

「久しぶりっすね、湯端さん」

隆昌は終始平静を装い、タバコを燻らせながら無愛想に努める。

隆昌と顔見知りである湯端勝徳は、何を隠そうベテランの警官であり窃盗やスリなどの事件捜査に長年携わってきた。隆昌も若かりし頃、彼に御厄介となったことがあり、その繋がりが今日まで続い

ていた。

「最近どうよ？」

「そうっすねえ、人並みの暮らしをしようと努力してますけど、なかなかうまくいかないもんですね」

落ちそうになる灰を近くの灰皿に擦り落とす隆昌。先端が鉛筆のように鋭くすると再び銜える。

「そういえば、湯端さん、そろそろ定年になるんじゃないですか？」

「まあな。いつまでも若いと思ってても、年なんかすぐに取っちゃうからな。俺が辞めるまでにひよつこのガキどもを育てなきゃなんねえんだ。おいばれ刑事の最後の仕事ってところか」

皮肉交じりに呟きつつ、足元を通り過ぎる鳩に目を向ける。

「なあ、昔の誼で若い連中にスリの実演をしてくれないか？ 教材によりよいものと考えてんだ。卓上の講釈より、生のスリ現場を見せてやりたいんだ。協力してくれねえか？」

どこまで本気で言っているのだらうと、隆昌には図りきれないものがあつた。警察官の前でスリを実戦しろというのは、果たして自分にとって得策なことなのだろうかと首を傾げずにはいられない。

「じよつ、冗談でしょ？ 狼の群れに羊を放すんですか？」

「へへっ、冗談に決まってるじゃねえか。だが、教材は必要なんだ、現実問題な」

意味深なコメントを残しつつ、初老の刑事はどっこいしょっともらしベンチから立ち上がる。

「ふああゝあ。隆昌、お前は更生したんだ。昔のお前に戻るんじゃないぞ」

最後、警官らしい言葉を投げ掛け、勝徳は隆昌の肩をバシッと叩きして去っていく。

「相変わらず、力加減の知らねえオヤジだぜ」

すっかり吸い終えてしまったタバコを灰皿の中に入れ、隆昌は叩かれた肩を違和感はないかと回す。

「……口では簡単に言えっけどさ、中々、人間は変われねえんだよ」

再び一人となった隆昌は、ようやく見つけたジツポを取り出し語りかけるのだった。

とある飲食店の前にてショーケースの中に入ったサンプルを眺めるカラメラ。和洋折衷な料理に空腹感ほ更に募り、物欲しそうに目移りしている。

「はあゝお腹すいたね、スウィート」

大きなショルダーバッグから顔を出す子猫のスイートに話しかける。

「世の中には、いろんなおいしいそうなのがあるんだね」

ガラス越しに店員や客、はたまた行き交う通行人などから、奇妙な風体や行動を不審に思ふ視線がカラメラに集中する。当の本人は、周囲のことなど気にすることなく立ったりしゃがんだりを繰り返す。通りを行き交う人混みの中に隆昌もいた。今の生活を変えるため一歩踏み出そうとしているのか、手には無料に配られる求人情報誌が握り締められている。

隆昌の目にも飲食店の店先で覗き込んでいるカラメラの姿が入る。妙な格好をした奴がいるなあと思わず、そのまま素通りしていく。

指を銜え、料理のサンプルを眺めていたカラメラだったが、隆昌が通り過ぎたことを予感したように後ろ姿を目で追っていた。

「……」

時刻は夕刻となり、仕事から帰宅した桃子はすぐに夕食に取り掛かった。

二人の同棲生活はかれこれ2年が経ち、お互いに違和感のあった生活はゆつくりと馴染んでいき、今では一緒にいることがごく自然といった雰囲気になっている。

出来上がった料理を、二人はテレビのあるリビングにて食べる。食事中は常にテレビが点いているため、二人の会話はあまりない。

どちらかがテレビに見入っていると、真面目な話どころではなくなってしまう。

「……あのね、大事な話があるの。聞いてくれる？」

隆昌に遅れながら食事を終わらせると、桃子は素早く食器類をまとめキッチンの流しへ持っていく。

「あつ、ああ、確か、そんなこと言ってたっけか」

テレビに夢中の隆昌は桃子の話を半分以下に聞き、真面目に受けようとする姿勢にならない。

「……真面目に聞いて」

話を聞こうとしない隆昌の姿に、流石の桃子も強硬手段としてテレビのリモコンの電源を消す。

「あつ……分かったよ、話、聞くって」

いきなりの出来事に一瞬ムツとするが、隆昌はようやく話を聞こうと桃子と向き合う。

「あの……私たち、そろそろ結婚しない？」

「……結婚」

そのワードを耳にし、隆昌の表情が真面目なものへと変わる。

「……私たち、付き合って3年になるし、同棲だっしてて。だから、そろそろ入籍したいって思ってるの」

『結婚』

人生において一番に輝く瞬間であり、新たな人生の幕開けを意味している。人として、ひとつの区切りとなるこの瞬間を、軽視する人はいないことだろう。

隆昌もいよいよその時が来たのかとを感じるものがあつた。しかし、過去の出来事から、桃子に依存している様。そして、何よりも、桃子に隠していることが心を苦しめ素直な想いを妨げていた。

「……そう言ってくれるのは嬉しいけどさ、結婚とか、入籍とか、まだ先でいいんじゃないか？」

「隆昌が定職に就いていないって事も知ってる。だけど、入籍したっていう事実があれば、世間の見方は変わると思うの」

確かに桃子の言う通り、入籍し、隆昌に守るべき家庭があると分かれれば、今まで苦労していた就職活動がやや柔軟になり、企業側も違う印象を持つかもしれない。だが、それだけでは丸く収まるほど簡単なものではない。

「……そうかもしれない。そうかもしれないが、そうしても解決しないことだってあるんだ」

「……解決できないことって何？」

つい口をついて出てしまった言葉に、桃子はすかさず言及してくる。

「そつ、それは……」

「……ねえ、話してよ。何もかも、私に教えてよ。隆昌の全てを知りたいの！」

メガネの奥の瞳に涙を湛え、桃子は隆昌に縋りつく。一緒に同じときを過ごしても、一向に縮まらない二人の距離。何か隠し事をし、間に隔たりを作ることには桃子はもう我慢できなかった。

「……タバコを切らしたの忘れてた。買ってくる」

この場の空気を嫌い、隆昌は桃子と視線を合わせることなく部屋を出て行った。

「……どうして心を閉ざしてしまうの。隆昌の心に触れたいよ……」
遠くでドアが閉まる音を聞き、桃子はテーブルに突っ伏し泣き崩れるのだった。

夜の街に飛び出した隆昌。

アパート近くの自販機を通り過ぎ、近所にあるコンビニへと足は向かっていった。

アパートを飛び出したというのに、すんなり用事を済ませてしまふのは何かばつが悪く、隆昌は少しでも遠出したいと目的地を定めていた。

勢いで飛び出したため、肌寒さを感じる。まだまだ冬は遠いとはいえ、夜にもなると寒さが素肌に浸透してくる。サブツと漏らしな

がら隆昌はジーンズのポケットに手をつ込み夜道を歩いていた。

街灯が一定の間隔で設置される通りを歩く隆昌。薄暗い通りを歩いていると、急に黒い塊とすれ違う。街灯の下を通り過ぎ隆昌とすれ違うと、それはどこかの民族衣装を思わせる肌の露出の少ない出で立ちをしていた。

一瞬気を取られ反射的に目で追う隆昌だったが、関わり合いになるのを嫌いそのままスルーしようとする。一方、すれ違った人物はというと、ゆっくりと振り返り立ち止まる。

「……あなたは何を迷っているの？ 何から逃げているの？」

耳を櫂る優しい声音に、隆昌は思わず立ち止まり振り返ってしまった。しかし、そこには人影はなく等間隔に並ぶ街灯の風景しかなかった。

「……気のせいだったか？」

妙に心がざわつく中、隆昌は何事もなかったかのように再び歩き出す。

隆昌が通り過ぎていったのを確認するかのように、謎の人物は電柱の影から姿を現す。完全に視界から遠ざかって行くのを確認し、口元を覆っていたマスクを外す。

「……次はあの人だね」

バッグから顔を覗かせるスウィートに、カメラは口元を綻ばせるのだった。

ここは次世代の治安を守る警察官を養成する学校。主に警察官になりたての若者から、専門分野にチャレンジしようとする警官たちが集う。講義をしているのは窃盗検挙のプロフェッショナルである湯端勝徳。定年を控え、若い世代に今まで培ってきた技術を伝授するため開いていた。

さすがに率先して集まってきた警官達のため、勝徳の発する一言一句を聞き逃すまいと真剣な眼差しで聞き入っている。勝徳もふざけたことを教えるわけにはいかず、自分の経験談や捜査に当たり注

意すべき点などを教える。

1時間にも渡る講義を終え、勝徳は持参した書類をまとめ会議室を後にしようとした矢先、自分よりも若い上司に呼び止められる。

「湯端さん、話があるんですが……」

勝徳の前に現れたのは、きつちりと制服を身に纏った長身の上司だった。

「折り入ってお願いがあるんです」

書類を小脇に抱え、勝徳は上司と相対する。

「引退を控えた身で恐縮なのですが、最後の現場に出ていただきたいのです」

「現場から離れて長い俺に、捜査指揮を執れと言っんですか?!」

上司からの意外な提案に、ベテランの勝徳も驚きを隠せない。

「無理を言わないでください。若手育成に協力しろと言ったあなたが、どうして俺を現場に戻そうとするんですか？」

「いろいろと事情がありまして、上から若手に実戦訓練を積ませることや、一向に減少しない窃盗被害をどうにかしろとの御達しがあつたんですよ。私としても苦渋の選択をせざるを得なかつたんです」

引退するベテラン捜査官に花道を飾らせるといふ、大義名分を与えようと画策しているのではと思えたが、若い奴らにも現場の状況を教える必要があつたし、個人的にもあと1度くらい現場を指揮したいという思いも少なからずあつたりした。

「……分かりました。その仕事、引き受けます」

現場という緊張感ある仕事に返り咲けると知り、勝徳は忘れかけていた捜査官としての勘を奮い起こそうとしていた。

数日後、ベテラン捜査官、湯端勝徳が1日限定で復帰する日がやってきた。

何年ぶりに訪れた会議室。そこに集いし顔見知りから新顔までの私服警官たち。揃った皆の目を見据え、勝徳は忘れかけていた捜査へ向かう瞬間に沸き立つ熱い鼓動に体が震える。

「君たちは、いち警察官である前に一人の人間だ。決して、無理はせず、自分も被害者も被疑者に対してもケガのないよう努めてもらいたい。以上だ」

起立した私服警官達に意気込みを話す勝徳。一瞬の気の迷いが過ぎるが、長年培ってきた経験が迷いを打ち払い奮い起こす。

勝徳の挨拶が終わると同時に一斉に私服警官は会議室を飛び出し、法と治安を守る番人として任務に就く。

犯行の半数以上が身動きのとり辛い満員乗車に集中している。

勝徳率いる私服警官達は全車両に均等になるよう人員を配置し、異常はないかを無線を介して伝える。

帰宅ラッシュに差し掛かったため、車内は文字通り鮎詰め状態。捜査のため乗り込んだとはいえ身動きが取りづらく、行動範囲や目の行き届く範囲が限られてしまう。

車両ごとに分かれた捜査官に不審なことがあればすぐに報告するよう指示を出し、犯行が行われる瞬間を捕らえようと手筈を整える。久しぶりの現場に勘を取り戻そうとする勝徳の元に、スリ犯の疑いではなく、若者二人による小競り合いが起きているという一報が入る。勝徳は捜査に支障をきたしてしまうと考えつつも、事態を収拾するため仕方なくその車両へと向かう。

向かった車両へ行ってみると、人がやっと一人座れるだけのスペースを巡り若い男が口論していた。満員だったのにも関わらず、その場所だけがぽっかりと開き、周囲の乗客たちは迷惑そうに視線を向けるだけで干渉しようとはしない。

若い私服警官は男たちの間に入り仲裁しようと試みるが、二人ともかなり頭に血が上っているようで、冷静に物事を考えられないままに興奮していた。

一向に事態の終息を迎えない状況に、勝徳も仕方なく仲裁に入る。道理を知った大人の登場に解決すると思いきや、席を奪われた男が暴れ始め力ずくで制止しようとする若い私服警官を払い飛ばす。飛

ばされた先に座席を固定するポールがあり、そのまま頭を強打してしまう。かなりの衝撃を受けた私服警官は脚から崩れ落ち気絶してしまう。

「いい加減にしろおおっ!!」

車両に居る乗客が振り返るほどの怒号を轟かせ、勝徳は暴力を働いた男を護身術で組み伏せ床に押さえつける。

「全捜査官に告ぐ、直ちに4両目まで来てくれ。怪我人だ」

男を押さえつけたまま無線を通じ指示を出す勝徳。ゆっくりと男を立たせ、後ろ手に腕を締め上げる。

「公務執行妨害で逮捕する！」

身動きの取れなくなった男も、口論していた相手方の男もすっかり大人しくなり反省の色を満面に表す。

乗客を掻き分けやってきた警官に男を預け、勝徳は気絶してしまった警官の介抱をする。

「大丈夫か？」

気絶した私服警官の上半身を起こそうとした瞬間、不運急を告げる一報が入る。

『こちら、最後尾。只今、現行発生！ 犯行を目視しました！』

集合した捜査官全員に緊張感が一気に走り、誰もが目を合わせる。次なる行動に出ようとするものの、電車の速度が徐々に減速していくのを感じる。

「まずい！ 駅に止まる！」

乗客達の隙間から覗くホームの様子に、勝徳は難しい決断を迫られる。

ここで犯人を追うことも可能だが、負傷した警官を残しは置けず、激しい葛藤に襲われる。

ホームに電車が到着したと同時に、雪崩のように乗客たちは降り始めきつきつ状態だった車内が一瞬だけ空く。

「どうしますか？」

勝徳の周りに集まった私服警官たちが、逡巡する様に居ても立つ

てもいられず声を掛ける。長考の間に入れ替わるように再び多くの乗客たちが乗り込んでくる。

「……その場で待機だ。犯人の追跡をするな」

一人の負傷者を出してしまい、勝徳は指揮官としての責務を果たすため負傷した警官を病院へと送り付き添った。

夜の待合室にて力なくベンチに座っている勝徳。一人の空間の中、今日の出来事を思い起こしてしまい酷く落ち込んでいた。無力で役に立つことのできなかった自分を叱責し、指揮官としての力量のなさに嫌気が差していた。

「湯端さん、こちらにいましたか」

今回一緒に捜査に参加し、スリの一報を告げた私服警官が勝徳しかいない待合室へやってくる。

「……ああ、君か」

完全に覇気を失ってしまった勝徳は、訪れたことに遅れて気付き俯いていた顔を上げる。

「……今回の一件、どう正当化しようとも全て俺が悪い。犯人を取り逃がした上に、同僚を負傷させてしまった」

「そつ、そんな、自分を追い詰めないでください。あなた一人が悪いわけじゃありませんよ」

「フツ、まだ若いから分かんだろうが、世の中、責任を追及され誰かがそれを負わなくちゃいけない。一度の失態だろうと許されることはない。それがプロっていうもんだ」

自分の踏んでしまった轍を、これからを担う若い世代が踏まないよう己が見本となったことを悟らせる。それが、現役を引退するベテランから教えられる教訓として。

「……あつ、そうでした。犯人が逃走の際に落としたものを持ってきました」

来た理由を思い出し、若い警官は透明なビニール袋に入れた落とした物を勝徳に見せる。

「おい……それ……」

袋の中身を確認した勝徳は、今までにない絶望感と間違いであつてほしいと願う気持ちの坩堝に陥ってしまう。

「ホントに……ホントに犯人が落としたんだな?!」

事実確認をするため、勝徳は若い警官に食って掛かる勢いで問い詰める。

「えっ、ええ、確かです」

様子が豹変してしまった勝徳に何か違和感を覚えるものの、若い警官はビニール袋を渡す。

「あの……どうかなさったんですか?」

「……あの野郎、生き方を変えたんじゃないのかっ!」

手にしていた袋を床に投げ付け、勝徳は悔しがりながらベンチの背もたれを殴りつけるのだった。

季節は冬へ向かう經由地点である秋に差し掛かり、街の木々に彩を与えてくれる。

とある紅葉が綺麗な公園へとやって来た隆昌と桃子。観光客を狙った屋台がちらほら店を開き、紅葉狩りの時期を逃すまいと五感を刺激するような商品を提供している。二人も小腹が空き、屋台で御馴染みのたこ焼きを買い二人で食べ歩く。

「綺麗な紅葉もみじね。同じ葉なのに、日当たりや気温の違いで様々な色に変わる。自然って不思議」

綺麗に色づいた紅葉の樹を見上げ、桃子はゆっくりと歩道に敷き詰められた葉を踏みしめる。

「……そうだな」

一応、隆昌も紅葉を眺める体で接しているが、どちらかというところ花より団子派で、徐々に冷めつつあるたこ焼きを食べる方に意識が言っている。

「……あっ、さっきからたこ焼きばかり食べてる。もっと、自然の美しさにも興味持たなきゃ」

「まあ、綺麗だなんて思うけどさ、見たただけでお腹は膨れないだろ？ やっぱ、先にある美より、目の前の食べ物にいつちゃうんだよなあ」

連続して二個・三個と食べたおかげで、口の端にソースやかťお節が付着している。

「もう、子供みたいに口の周り汚して……」

まるで子供の面倒を見る親のように、桃子は隆昌の口元をポケットティシューで拭く。一方の隆昌はやはり恥ずかしらしく、視線を外し苦い顔をする。

しばらく紅葉で色づく並木道を歩いていると、反対側からロングコートを着た勝徳がやってくる。

「……お二人さん、紅葉見物かい？」

一瞬だけ身構えてしまう隆昌だったが、気を持ち直し、桃子を紹介する。

「こちらは湯端さんで、昔、世話になった警官なんだ」

「……警官」

隆昌から、昔、ワルでやんちゃをしていたと聞いていたが、知り合いに警官がいたと分かり体が強張ってしまう。

「桃子さんが今の恋人かい？」

勝徳の一言に緊張していた気持ちが切れ、お互いに意識してしまい照れくさそうに簡潔な言葉で肯定する。

「おお、そうなのか。付き合ってどのくらい分かんが、結婚の話とか出てるんだろ？」

勝徳は終始、長年見続けてきた父親のように和やかなムードで接する。それはまるで、次に待つ衝撃的なシーンを演出するかのよう……

「えっ、ええ、まあ、なんとなくですが……」

この話題についてつい最近にも持ち上がっただけに、隆昌は正直な気持ちを素直に打ち明けることができなかった。

二人の関係性を知った勝徳は、徐にポケットからジップを取り出

し隆昌に向けて投げる。隆昌は反射的に受け取ると、それが何なのか瞬時に判別できた。

「……これって、隆昌のジッポ？ どうして、湯端さんが持つてるの？」

何故、警官である勝徳が隆昌の使っているジッポを持っていたのか。それは、何を物語っているのか？ 一つの結論が、容赦なく暴露されようとしていた。

「長年の付き合いだ。どう選択するべきか考えさせてやる。次の選択肢から選べ。1・仕事中に捕まる。2・自首。3・逃げる、だ。逃げるにしろ、一人か二人かで分かれるな。どの選択がいいか、二人でじっくり話し合って決めるこったな」

最後、見守ってきた年配者として、捜査をする警察官としての眼光を瞳に宿し、勝徳は二人の横を通り過ぎていく。

「……」

「……」

全てを見透かされてしまった隆昌。そして、全てを知ってしまった桃子。二人の間に気まずい空気が流れ、互いに話し掛けることにさえ恐怖し呆然と立ち尽くすのだった。

紅葉を観賞するムードが一瞬にして崩れ去り、二人はどちらからともなく家へ帰ることを選択した。その間、終始無言で帰路に着き、ようやく口を開くようになったのは家に到着してからのことだった。だいぶ陽が陰り、電灯が必要となるかならないかの時間帯になったがそれでも自然光のみの空間で、隆昌がようやく重い口を開く。勝徳が残した伏線に従い、ありのままの現状を打ち明けた。

「……分かっただろ、俺が結婚しようって言わない理由が。桃子は、犯罪者と結婚しようとしていたんだ」

隆昌にとっても辛い告白であったが、それ以上に辛い思いを桃子は受け止めなければならなかった。

「今なら……今だったら別れられる。お互いのために……」

水を打ったように静まり返った室内。テーブルの向かいに座る桃子は、終始無言で俯いたまま身動き一つしない。それは何かを耐え、最良の言葉を紡いだそうと足掻いているようでもあった。

「私……私、別れたくない、絶対！」

ゆつくりと上げた顔には全てを理解し、全てを受け止め、決意を固めた揺ぎない意志に満ち溢れていた。

「桃子……」

「私、隆昌と離れたくない……だから、一緒に逃げよう。そして、違う場所で

暮らそう、ねっ……」

自らも犯罪者の片棒を担ぎ、一緒にいたいと宣言する桃子。隆昌以上にリスクを背負い込むというのに、彼女はそれでも離れたくないと言えを導いていた。

「……ダメだ。巻き込むようなマネ、俺にはできない。別れるんだよ、俺たち。

それが何よりの最善策だ」

これ以上、話したくもないし、桃子の話を聞く気にもなれなかった隆昌は流れそのままにアパートを飛び出す。後腐れなく、何もかも消去するつもりで。

陽はすっかり暮れ、辺りは夜の帳が降り始めていた。

着のみ着のまま飛び出した隆昌は、何かを求め夜の街を徘徊した。勝徳が提示しなかった第4の選択を自ら導き出し、それを実行できる場所を探し歩いていた。

できるだけ人目につかず、増して人為的に制止できない場所。そして、一番に肝心なのは、命を絶てること。

自責の念に駆られ、自分の死に場所を求めている。今までに犯した罪の数々。人を裏切り、人を利用してきた。そして、何よりも最愛とも呼べる存在の桃子を苦しめていた自分が許せず、隆昌は自分の処分を己の下した判断に従い実行しようとしていた。

繁華街を離れ、隆昌は人気のない地下鉄が走る橋の上へとやって来た。自分の命を絶つ場所が、今まで自分のフィールドとして利用していたものだと思い、隆昌の顔には皮肉混じりな笑みが浮かんでいた。

「……これでいいんだ。これで、俺は、何もかもから解放される……」

自分の背丈よりも高いフェンス越しに下を窺い、これで命を絶てるのだろうかと思問が浮かんでしまう。しかし、それは単なる躊躇いだと切り捨てフェンスに手を掛け登ろうとする。

「……あなたの導き出した答えは、これなのですね」

不意に声を掛けられ、隆昌は一瞬心拍数が跳ね上がり素早く手を掛けていたフェンスから降りる。

「だっ、誰なんだ、お前」

「……それで全てが解決すると思っているの？　それで、全てが救われると思っているの？」

違和感のある服装のカラメラは、隆昌の問いを答えることなく続ける。顔を覆っていた布を外し、大きなショルダーバッグから不思議なオーラを放つ瓶を差し出す。

「あなたの心に、1粒のキャンディーを」

両手で差し出された瓶や、人間とは思えない目に見えない恐怖に慄くものの、隆昌は瓶の中へと手を差し入れる。間もなく差し入れた手の中に何か固形のも物が現れたのを感じ、ゆつくりと手を引き抜く。恐る恐る手を開いてみると、そこには1粒の白いアメがあった。

「それが、あなたの癒しの1粒なんですね」

終始、人形のように表情のなかったカラメラだったが、隆昌の手の中にあるアメを確認し柔和になる。

掌にあるものが本当にアメなのかを確かめるため、隆昌は恐る恐るゆつくりとアメを口に含む。入れた瞬間、口一杯に広がっていく清涼感。

その感覚がある記憶を思い起こさせる……

あの頃の俺は血気盛んで、ある意味やんちゃで、ある意味どうしようもなくバカヤロウだった。善と悪の区別もなく、ただ毎日が楽しければそれで良かった。

年端の行かないガキだった俺は、スリで初めて捕まった。そう、あの湯端さんに。

全ての大人に反感を抱き、絶対大人なんかになりたくないと思がっていたあの頃、俺は大人が発する言葉全てに耳を逸らし聞く耳を持たなかった。

粹がっていた俺のことを、湯端さんは親身になって考えてくれた。大人として、男としての生き方を教えてくれた。そして、眠気覚ましになると言っていたハツカあめをなめさせ、お前もこんな腐った生活から目を醒ませと教えられた……

いい年になったつてのに、何にも変わっちゃない。あの人から教わったこと、全然活かせちゃいない。桃子つていう大切な存在まで現れたつてのに、お前は昔のまんまだ。変わるんだよ、今、この時から……

記憶が呼び起こす遠き過去のキオク。長年に渡って進歩を見せない自分。そんな過去と決別するため、隆昌はある場所に携帯から電話を掛ける。

その時にはもう、カラメラの姿はなかった。

隆昌の居なくなった部屋。

音を発する電化製品を全て消し、一人残された桃子はソファに覆いかぶさり顔を埋め泣き崩れていた。いつでも隆昌からの連絡が来るかも分からないため、傍らには携帯が置かれていた。

その携帯を涙で濡れた瞳で窺った瞬間、突然バイブレーションと

同時に着メロが流れ、発信者が誰なのか瞬時に気付かせる。

「……隆昌！」

素早い瞬発力で携帯を掴み取ると、急いで通話ボタンを押す。

「もしもし、隆昌！」

「ああ、俺……」

待ちに待っていた人物からの電話に、桃子の胸は安堵感に包まれる。

「どうしちゃったの、急に家を飛び出したりして」

「……ゴメン。何か、パニックちゃって、頭ん中が真っ白になっちゃって、気付いたら飛び出しちゃってた」

隆昌の声を聞きながら、桃子は外していたメガネを掛ける。

「そっ……ねえ、家に戻って来てくれるんでしょ？ ちゃんと話……」

……

「あのさ、桃子……俺、決めたことが二つあるんだ。一つは、俺、

野郷隆昌は茅場桃子と結婚する。俺の妻になってくれるか？」

突然のプロポーズに、今度は違う涙が止めどなく溢れてくる。安心感や嬉しさが心を優しく包み、今まで抱いていた負の感情が掻き消されていく。

「うっ、嬉しい……もっ、もちろん、断る理由なんてないよ……」

止めどなく溢れ出る涙をメガネの下から入れた指先で拭う。

「そうか……そう言ってくれると、俺も安心して刑期を全うできるよ」

「えっ、刑期？」

「……何年先になるか分からないけど、俺が戻ってくるまで待っていて欲しいんだ。必ず、迎えに行くから……」

「うん……うん……待ってるよ。ずっと、待ってるから……」

桃子との電話を終わらせ、携帯を切る隆昌。自分の気持ちを素直に打ち明け、隆昌の心に迷いはなかった。その証拠に、穢れた心を洗い流す涙が一筋零れ落ちていた。

「話、つけたようだな」

歩み寄ってくる初老の刑事。勝徳は優しく隆昌の肩に手を乗せ、決意したことを確かめる。

「あつ、ああ……」

一度、手の中にある携帯を見つめると、そのままギュツと握り締める。

「それじゃあ、行こうか……」

勝徳に肩を抱かれ、隆昌は共に警察署へと入っていった。泣いていたことを誤魔化すように宙を仰ぎながら。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0147j/>

Candy Box

2010年10月9日03時42分発行